

構造的心疾患治療の進歩

企画：原 英彦

(東邦大学医療センター大橋病院
循環器内科)

今回の HEART's Selection では構造的心疾患についての特集を組んでみた。構造的心疾患 (SHD: Structural Heart Disease) という言葉自体は 1940 年代から海外で使い始められた言葉であった。この時期の構造的心疾患という言葉自体には解剖学的な意味合いが強く、心筋疾患や先天性心疾患といった文字どおり心臓の構造異常を指していた。2000 年代初頭より、心疾患治療という面からは不整脈アブレーションの領域で一時的に用いられていた用語であった。

しかしながら現在の SHD とは心血管カテーテル治療が可能となった弁膜症、成人先天性心疾患、心筋疾患、左心耳、心不全治療を主に指しており、非虚血性心疾患で心内に何らかの構造異常を有するもの全体に適用される幅広い領域の疾患群を意味する。同領域を世界でリードしてきた欧米のグループが 2000 年代初めから上記の意味合いで SHD という言葉を使い始めていたが、本邦では 1980 年代から国内に拡がった僧帽弁狭窄症に対する PTMC (percutaneous transluminal mitral commissurotomy: 経皮的僧帽弁交連切開術) が本領域の最初の治療といえよう。続いて 1990 年代に入り心房中隔欠損閉鎖栓の治療が開始され、2005 年には同デバイスの承認を得た。2013 年には重症大動脈弁狭窄症への TAVI 治療、2017 年に僧帽弁閉鎖不全症への MitraClip、2019 年には奇異性脳塞栓症予防のための AMPLATZER PFO 閉鎖栓、そして同じく心原性脳塞栓予防のための左心耳閉鎖栓である WATCHMAN が承認され、いよいよカテーテルインターベンションの柱のひとつとして SHD 治療が大きく羽ばたくことになった。これからは三尖弁閉鎖不全症、そしてカテーテルを用いた僧帽弁植え込み術などが注目されることは海外の動向からも間違いのない事実であろう。本特集では海外にてこれらの先進的治療に関して勉強された国内エキスパートの先生達から、これから注目される SHD デバイス・治療の紹介を行ってもらう。また、成熟した TAVI 治療や ASD 治療のエキスパートの先生には本邦の現状について解説をお願いし、同様に左心耳閉鎖術や、PFO 閉鎖術についても各々のフロントランナーである先生方に概説して頂く。本邦における SHD 治療の総集編ともなる今回の HEART's Selection をお楽しみ頂きたい。



HEART's
Selection